

薩摩海域の龍宮伝承

——中近世移行期における薩摩の文化環境——

鈴木 彰

一 薩摩からの視界

東アジアを視野に入れた比較文芸研究は大きく様変わりしつつある。中国を日本と対置し、前者から後者への表現・思想・文物等の影響や移動を一方的に論じてきたことへの見直しが図られ、漢文文化圏という一定の空間のなかで展開してきた文学・言説の動態を多元的に見つめ、多方向的に人と文物が行き交う環境が描定されるとともに、その意義が掘り起こされるようになった。¹⁾

琉球もまた、そうした環境にある拠点として、東アジアの時空間のなかで定位すべき地域のひとつであり、そうした観点から琉球文学の読み直しも続けられている。²⁾ 文学をめぐる琉球とヤマトの関係史は、現代にすらなる歴史認識や心性の形成史の根幹に関わる部分であり、今後ますます精緻に、その重層構造を解き明かす必要がある。他方、東アジアにおける交渉史を見すえた東アジア文学としての琉球文学の読解も重要な課題となる。

同様のことは、薩摩という地域の問題としても存在する。ことを中近世の状況にかぎってみても、島津氏一門が築いていた領国の歴史は、武家政権・朝廷・有力公家といった〈中央〉との関係をくり返し更新しながら進んでいった。一方で、その地理的条件ゆえに早くからアジア諸地域との往来が続いてもおり、それは必ずしも〈中央〉の意向に沿った

ものばかりではなかったのである。こうした状況下で育まれた島津氏領国の文化環境や文学言説もまた、冒頭に述べたような観点にたつて分析すべき対象であることは疑いない。

琉球とヤマト、中国と日本、琉球と中国、琉球と朝鮮といった比較の構図を設定することでこぼれ落ちてしまうものがある。薩摩はそうした存在の典型ではないか。もちろん、薩摩それ自体は日本を構成する一地域であるから、単純に他と同列視することはできない。しかし、あえて琉球と薩摩という地域を対置してみると、そこに日本という枠を並べるわけにはいけなくなり、たとえば江戸や京という第三極としての地域社会の存在が浮上してくる。その間に伏在する権力と支配の重層構造をおのずと自覚せざるをえなくなるのである。それは、多くの島々からなる琉球国の内側にもおそらくあてはまる。

日本国内各地が結ばれ、東アジアの各地にも続いていた人と文物と〈知〉が往還する環境の実態を、薩摩（島津氏領国）からの視線で眺めてみることも必要ではないか。なにより、薩摩という地域の歴史的、地理的条件や伝来資料の実状などに鑑みても、その意義は小さくないように思われる。それは、他地域との関係史のなかに当該地域を位置づけ、そこに成り立つ文化環境をより大きな多面的集合体として照らし出すことを意図した、いわば「外向きの地域研究」として構想すべきものである。薩摩の文化環境に関する研究は、より大きな文化環境を把握するた

めの事例研究のひとつに他ならない。

右のような展望と問題意識のもと、本稿では、およそ十六世紀から十七世紀にかけて、言い換えれば中近世移行期に、島津氏領国を生きた人々によって書き留められた龍宮伝承のいくつかを取りあげ、まずはそれぞれの特質を検討する。そのうえで、当該期の島津氏の領国文化を特徴づける一側面、とくに幸若舞曲の受容と再生にかかわって、ひとつの問題提起を試みたい。

二 異域体験にみる龍宮言説

文禄・慶長の役に際して朝鮮半島へ渡った島津軍の武士たちの体験記（覚書）に、龍宮にかかわる言説が現れている。ここでは、「忠増渡海日記」と「大嶋出羽守忠泰義弘公御供致高麗国渡海覚書」というふたつの文献をとりあげ、島津氏領国を離れ、日本を離れて船出した二人の武士たちによる異域体験の語りかたに注目してみよう。

（1）「忠増渡海日記」にみる「海龍王法楽」連歌

「忠増渡海日記」（以下、「日記」と略称）は、島津氏領国を代表する武家文化人の一人、新納武蔵守忠元^③の次男である忠増が、文禄の朝鮮出兵に関する自らの体験を回想的に記した覚書である。その叙述は、「文禄元年^④（弥生朔日）に忠増が夢想を得たことから始まる。忠増は島津義弘・久保に同行することとなり、父母を残して新納家の所領である薩摩の大口を出立、その後は九州の西海岸地域を北上し、やがて肥前名護屋、対馬などを経て朝鮮半島へと渡り、さらに半島の奥へと進んだ。「日記」には、その間の出来事が日次記の体裁でつづられている。

詳細は別稿^⑤に記したが、文禄への改元が天正二十（一五九二）年十二月八日であることからみて、起筆部にみえる「文禄元年^⑥（弥生朔日）

という設定自体が、この「日記」があとから自身の体験を回想的にまとめた「覚書」であることをものがたっている。その成立は、忠増が歿した慶長九年（一六〇四）以前（同十三年説もあり。『本藩人物誌』）となる。その叙述からは、忠増が和歌や連歌に加えて幸若舞曲などの語り物文芸にも深い理解をもつ、注目すべき武家文化人であったことが読みとれるのである。

さて、次に引用するのは、対馬の「大と泊り」で「高麗」へ渡海するために「順風」を待っていた同年五月二十五日、忠増が桂忠実・白蔵篤真^⑦と三人で計四十四句の連歌を詠んだことが記された箇所である。

さるほどに、廿五日ハ桂殿・白坂蔵人殿・某参合、つれ／＼のアマリニ、四十四句つけ侍り候。されば又いつ／＼ヨリもひがこと

おほくおハし候へとも、其日／＼のアリことを書付候ま、如此候。

舟つなくほともみしかよみなと風 桂殿忠実

月も汀の夏ふかき比 新太忠増

雨はる、砂路遠みはしゐして 白蔵篤真

…（中略）…

をしめとも春ハ弥生に移来て

ましはるとちの心のとけし 同^⑧

忠実十五

忠増十四

篤真十五

海龍王法楽トシテ興行申候。亭主忠増也。

「日記」の記載によれば、忠増を含む島津軍は四月七日に肥前名護屋の陣を発ったのち、海路諸所を移動しながら、五月十九日に「対馬ノふちうと申込み」とに渡り着いた。そして島内の湊を移動し、二十三日の「晩」に「大と泊と申所」に着船、そのまま二十四日・二十五日と「順

「風」を待っていたとある。右の連歌は、この二十五日に「海龍玉法楽」のため、つまりこの先の航海の安全祈願を意図しておこなわれたものとされている。

発句は「舟つなくほともみしかよみなと風」とある。「海龍玉法楽」という明確な意図をもった連歌興行であることを勘案すれば、発句では、渡海を控えて船を湊に繋留している忠増ら島津軍の現状が重ねられているとみてよいだろう。いうまでもなく、「みしか」は、第一義としては船を「みなと」に留めている期間が短い意だが、「みしかよ」と続くことで短い夜の意が響きます。この発句に脇句が交響し、夏という季節を前景化させ、夏五月二十五日の渡海前夜の海辺という状況があざやかに浮かび上がることとなっている。

一方、第四十四句（結句・挙句）に目を転じてみよう。「ましはるとち」は、まずは連衆である忠増ら三名を指示してしよう。ただし、「海龍玉法楽」という目的に照らせば、彼らを含めた島津軍全体をさすともすることも可能で、その「心のとけし」とは、渡海する島津軍の安全への願いを祝言として表現しているとみられる。また、第四十三句では、「春」「弥生」という季節が提示されているが、忠増を含む島津軍はこれに先だって三月二十一日から四月六日まで肥前名護屋に在陣していた。

同廿一日ヨリ四月六日までハなこや御陣なされ候、其間ハ日々に石かけ小屋普請などに日を送り待候、彼奉行ハ桂殿、敷祢殿、任世、某此四人ナリ、然者間十七日アリて普請首尾申候、

最後の二句では、この経験を踏まえた世界が提示されていると解釈するのが妥当であろう。ちなみに、右の引用にもみえるように、名護屋在陣中、忠増は連衆の一人「桂殿」と同役の小屋普請奉行として極めて近い環境にあった。

右の連歌をおこなった夜が明けた翌日、島津軍はいよいよ対馬を離れ

ることになる。

同廿六日者、舟衆とも順風ナク候之間、出舟難成之由申候へとも、いつまで此嶋へハ有ヘキトい、て、無利ニ舟をいたしてアリければ、日よりよく成て、日本の地ハ今をかきりよと思ひ、心ほそく風にまかせて行ほとに、酉刻と申にハ高麗のみなど釜山浦と申て、日本ヨリの渡口に着舟候、扱もくと思ひ、心おほえすにかく、

日本ハこまろこしといふ国ニ船ニ乗てそ我ハ来めり

以上のような展開を踏まえると、先の連歌は、「日本の地」から「高麗」への最後の渡海直前の出来事として位置づけられていることがわかる。そして、その渡海は、波線部のように決して「順風」が吹いているわけではないが、さし迫った状況に対応するために危険を顧みず「無利」に出船したもので、「心ほそく風にまかせ」た、すなわち運を天に任せた渡航であったと記される。渡海の困難さとそれゆえの不安が前面に打ち出されることで、その成功は、必然的に先の海龍玉法楽連歌が奏功したことを際立たせることとなっている。一連の叙述には、強い構成意識がはたらいっている。

関連していえば、前掲した連歌の引用の直前には、「されは又いつくヨリもひがことおほくおハし候へとも」（破線部）とあった。この表現によれば、忠増はこうした連歌を他にも行っていた可能性が高い。しかし、忠増はここまで他の連歌興行に言及していない。このことも、「海龍玉法楽」連歌の意義を際立たせる効果につながっている。

そもそも、海路への不安と安全を祈る心は、対馬と「高麗」の間の渡海時にのみ生じるものではないはずだ。忠増自身、すでに名護屋を出航する際、大きな不安を表明している。

四月七日と申者、名護屋の陣をいて、舟ニ乗て、はや壱岐の嶋へと心さし、おひかせよきほをあけて、行く跡をかへり見て、はや

ほと、をく、へたて来て、心のうちにおもひしハ、うら山しくもかへる浪かなの^⑦この葉も、かくのこつく身のあハれやかなして、よみ侍りつらん、もし今日日本を出て、又立帰らんことも定なければ、かたみにと思ひ、よしあしハしらす、書付侍りタリ、

けふよりハうき世の外に立出てうゐのみやこに帰行かな

名護屋を發つ時点で「今日日本を出」ると述べており、未知なる地域へ進むことへの不安を看取できる。また、対馬に着く直前には、「順風^⑧ほをあげ、浪路を遠く行、嵐のにハかにむかいぬれば、舟子とも声くどうようす、されは又、かぢのをれたるなと、いゝて、さハく舟もアリ」と記されるような危機に陥つたという。忠増はこののち、船酔いして倒れた人々をみながら、「舟に乗て高しほ酒やのみつらんよひみたれふす人のあハれさ」と詠んでいる。

記述されてはいなくとも、忠増がこうした折々に「海龍玉^⑨」に祈つていたであろうことは想像に難くない。つまり、「海龍玉法楽^⑩」という話題は、「日記」のなかで、あえて場面を選んで位置づけられていると考えるべきなのである。

冒頭に述べたとおり、「日記」は忠増が自らの体験を回想的にまとめあげた「覚書」である。そして、随所に和歌を盛りこみ、語り物文芸の文体を応用するなど、忠増は「日記」を文芸的著作としてまとめようとする志向を強く持っていた。したがって、「海龍玉法楽^⑩」という行為が、対馬を出る際の話題として記されていることについて、単に事実がそうであったとみるだけでは不十分だろう。「海龍玉^⑨」が居る龍宮は、「日本の地」と「高麗」の間に横たわる海を眼前にして想起されている。「今日日本を出る」とも認識されていた名護屋出立のときではなく、「日本の地」に属する島々を島渡りしている段階でもなく、このタイミングを選んで「海龍玉法楽^⑩」の連歌が位置づけられていることに留意したい。

忠増にとつて、龍宮は「日本の地」と「高麗」の間に広がる境界海域の体験と結びついた異域とみなされていたのである。

(2) 「大嶋出羽守忠泰義弘公御供致高麗国渡海覚書」にみる龍王への祈願

続いて、島津義弘に従つて慶長の朝鮮出兵に従軍した大嶋忠泰の覚書「大嶋出羽守忠泰義弘公御供致高麗国渡海覚書」(以下、「大嶋忠泰渡海覚書」と略称)に目を転じてみよう。^⑪

忠泰は高城備前守重誠の嫡子で、母が大嶋出羽守忠明の娘であった。幼少より「真言宗之出家」としての数年在京経験があったという。しかし、母方の大島家で忠明・明久親子が相次いで戦死して嗣子がなかったため、島津義久の命で大島家を継ぐために還俗したと伝えられる(『本藩人物誌』)。忠泰もまた和歌をよくした武家文化人のひとりで、高麗出陣の際の新納忠元との贈答を含めて、本覚書のなかには数多くの和歌が収録されている。

このときの忠泰の渡海体験とは、大風による遭難と漂流体験に他ならない。「大嶋忠泰渡海覚書」は漂流記という一面をもつのである。まずは、関連記事を見渡してみよう。

明る廿五日、月出て給へハ、又出ふね申ける。類船も跡や先に乗りうかへける。…(中略)…西の刻程より俄かに大風吹出て、波ハ山をかさねたるふせひにて、前も後も見へわかす。さあらハ、帆をよろしなとしける折ふしに、波のあらましきに梶を押をられる程に、…(帆柱が折れ、積荷を海中へ投ずることなど・中略)…只今社大海のそこへしつみはてけるよとて、きも玉しひも身にそハす、口惜も有かなと、声くゝに仏の御名を唱、りんせうの思ひをなす人多かりける。かやうの事ハ、神の力ならてハ、迎も助る事なりかたけれ

ハ、渡辺作右衛門尉・有馬の弥六兵衛、みつから腰の刀を八ツの龍わうへ奉り、波風をしつめてたひ給へと、口／＼に祈りけるハ、哀れ成し事共也。其上、もとより迄はらひて海へ納るうへハ、衣しやうの類、誰か残す人（もなか）りける。……

再び「こまの国」へと出陣した島津義弘に供すべく、忠泰は慶長二年（一五九七）二月下旬に大隅の馬越を出立した。そして四月二十四日に肥前平戸に到着、その翌日に壱岐に向けて出船する。しかし、俄に大風が吹き、大波にもまれて船は操作不能に陥った。これ以後、忠泰は二十八日戌の刻に長門国三嶋に漂着するまで、壮絶な漂流を体験することになる。その間の出来事として、傍線部のように、「八ツの龍わう」へ奉るべく、刀や髻、着物を海中に投じる者がいたことが記されている。

方角を失った船中で一晚を明かした翌日、忠泰は「口に任、ふなはり」に立あかり、「伊勢の御神」と「氏神」へ祈誓する和歌を詠むと、次のような行動をとったという。

其時、みつから後生のつとに、兼てたもちをきたりけるほけ経の八まき、金剛経、神道仏道の切かみ、けちみやく、りうなどのたうとき物のたくひを、残なく龍宮へ奉て、此舟の内のも共たすけ給へや、八大龍王と、きせい申あければ、左様のきとくニや、丑寅の方とおほしきに、山かけかすかに見へたりける。其儘、是に力を得て、二度我国へ此舟を著て給はらハ、一代の其内に一万句の連歌興行申べく、又神舞なともとり行わんと、かすの立願かぎりなし。

忠泰は法華経、金剛経、神道仏道の切紙・血脈などを、「龍宮」へと奉じたのである。忠泰が、幼少のころから「真言宗之出家」として生活していたことはすでに紹介したが、還俗した後もこうした経典・切紙・血脈類を肌身離さず持ち続けていたのであった。⁽¹⁾この時、忠泰は験者のごとくふるまい、船中の人々の無事を「八大龍王」に祈誓した。そして、

帰国した場合には、「一万句の連歌興行」と「神舞」（神楽のこと）奉納を約したのである。

（3）知識・想像力と実体験の交錯——島津氏領国と幸若舞——

新納忠増と大嶋忠泰の渡海体験は質的に大きく異なっている。しかし、二人はともに、日本と朝鮮半島との間に広がる海域についての知識と想像力を駆使して、それぞれの体験記を織りなしていった。こうした「覚書」は、当事者の体験が基盤にあるとはいえ、単に出来事や見聞を時系列に沿って並べた記録というわけではない。そこで語られるのは、筆者自らがのちに再構成した記憶、言い換えれば物語化された体験なのである。その叙述の質には、必然的に筆者の文芸・文化面の知識と素養が深く関与することになる。

ところで、十六世紀後半期の島津氏領国（薩摩・大隅・日向国）で、幸若舞曲が広く受容されていたことは、森末義彰氏によって早くに指摘されている。⁽¹²⁾最近では、宮腰直人氏が京下りの幸若舞大夫道味に注目しながら、島津義久周辺における幸若舞曲受容の実態について、新たな指摘を付け加えている。⁽¹³⁾そして、新納忠増もまた自らの文業にその文体やモチーフを応用できるほどに幸若舞曲に親しんでいた。⁽¹⁴⁾今のところ、大嶋忠泰については幸若舞曲受容の実態を確認できないが、和歌や連歌をよくし、宗教者としての側面をも兼ね備えていたことを考えれば、島津氏領国に生きる武家文化人のひとりとして、幸若舞曲と全く接点があったというほうが不自然ではなからうか。

こうした薩摩の文化環境を前提としてみると、幸若舞曲に「大織冠」「笛の巻」「百合若大臣」など、天竺・唐土・高麗・日本を結ぶ海域が舞台となる曲が複数存在することがあらためて注目される。これらは、日本を含む東アジア海域の地理空間をおのずと意識させるとともに、展開

上、龍宮・龍王の存在が重要な鍵を握る物語群である。なかでも「大織冠」は上演記録も多く残っており、人気曲だったことが知られている。そして、「大織冠」は「笛の巻」とともに確かに十六世紀後半の島津氏領国で受容されていたのであった¹⁶。

島津氏領国の人々にとって、朝鮮半島への渡海とはもちろん軍事動員ではあるのだが、幸若舞曲に親しむ環境が培われていたがゆえに、一面では、各曲から得ていた異国へ続く海への知識と想像力を、現実に体験する異域の実態と照らし合わせていく体験でもあったといえよう。知識と想像力と実体験がせめぎ合うなかから、忠増や忠泰の「覚書」にみえる龍宮言説は生み出されている。もちろん、彼らの龍宮理解の源泉は幸若舞曲のみに限定できるわけではない。とはいえ、都と島津氏領国との間で、幸若舞曲とその関係者が往還する状況を勘案せずして、その言説の響きは読み解けないのではなからうか¹⁷。

三 二系統の龍宮伝承——南薩の二つの信仰圏——

ここで視点を転じ、薩摩半島南端域に根づいた、特徴的な二つの龍宮伝承を取りあげてみたい。

(1) 穎娃・開聞宮信仰圏の龍宮伝承

元禄十一年（一六九八）四月に編纂された『穎娃村里改帳』は、「薩脇之一宮」である開聞宮について、「和多都美神社と申時者龍宮之御垂迹之由候」と記している（一、開聞宮）。また、開聞宮の別当寺瑞応院関係者の手になる『薩州穎娃開聞山古事縁起』には特徴的な龍宮観念に支えられた記事が散見する。しかし、同書は延享二年（一七四五）の編纂物であり、開聞宮は伝来した記録・文書類を中世末の戦禍でほぼ焼失している¹⁸。そのため、十六世紀以前の状況を同時代文献からたどるこ

とは困難な状況にある。しかし、近年、「門之浦伝来絵巻」（ミュージアム知覧蔵）と平峰家蔵「富士巻符図」¹⁹が相次いで発見され、これらが十六〜十七世紀の開聞宮信仰圏において制作・享受されたこと、またその内容に地域に密着した龍宮観念が内包されていることなどが明らかとなった²⁰。これによって、中世末の開聞宮の信仰体系に、この地域に即した形で根づいた龍宮観がすでに組み込まれていたことを見通すことができるようになってきたのである。

さて、『薩州穎娃開聞山古事縁起』には、「穎者水之称、専依玉之井」名者乎、娃者美女之義、定依龍女一名者乎、彼龍界爾後湧出于此界、成陸地由為郡名、」（一、穎娃郡名義之事）、「景行天皇廿年庚寅冬十月三日之夜、国土震動風雷鼓波、而彼龍囀湧出于此界、吼成難思嵩山、即其跡成池、今池田之池此也、」（二、開聞嶽湧出之事）のように、穎娃の地そのものがかつての「龍界」「龍囀」であったという認識が読みとれる。ここでは同書巻頭で示される龍宮と深く結びついた縁起言説の内容を確かめておこう。

神代卷云、皇御孫尊有三御子、所謂火闌降尊・彦火々出見尊・火明命此也、于時、兄火闌降命自海幸、御弟彦火々出見尊自山幸、御始御兄弟相語曰、試幸易、終相易、各不得其利、兄悔、乃弟弓矢返、己釣々乞、弟尊時已兄釣失、訪不見、無由故、別新釣作兄与、不受、其本釣急責、弟尊患、即其横刀以新釣作一箕盛与、兄忿曰、雖不我本釣多不取云、益復急責、故彦火々出見命愁在甚深、往吟三海畔、于時鹽土老翁逢、老翁問曰、何故御在愁乎、对云、尊本末以、老翁曰、何愁乎、吾応為君度云、乃無目籠作、彦火々出見尊入之、奉三海沈、急至三海神宮、爾時龍女豊玉姬排闥、而侍者群従出来七十二人、采女玉壺以玉鏡汲玉之水、時彦火々出見尊御影現移水面、龍女見此驚言、宮婦入、父神豊玉彦告之曰、門

前井辺樹下貴客、御骨法非^レ常、八重疊^{（意）}敷^三床檣百机^三、以尊延從容
言曰、問^三奉其來意^一、尊対曰、釣尋由言、即海神召^三集大小魚鼈^一、問^三
釣所在^一、数万魚鼈一無^レ知者、爰赤女魚口痛不^レ來、仍召^レ之探^三其口^一
釣有、取^レ之事与^レ尊、乃至終娉^三龍女豐玉姬^一為妻、在^三于彼^一三年
三月也、海神曰、天孫欲^レ歸郷吾当^レ送奉^一、使潮溢瓊・潮涸瓊兩珠
有、納^三宝塔^一是奉^レ尊也、（以下略）

（一、額娃郡往古龍海時之事）

「額娃郡往古龍海時之事」という章題自体に、先述した額娃＝龍宮と
いう認識があらわになっている。ここで語られるのは、彦火々出見尊の
龍宮訪問譚（いわゆる海幸・山幸の物語）である。釣鉤をなくして兄の
怒りを買った弟「山幸」（彦火々出見尊）は、「海畔」で「鹽土老翁」
と出会い、その助言で「無目籠」に入って「海神宮」に至る。そして、
「龍女豐玉姬」の一行と出会い、その父「豐玉彦」すなわち「海神」に
來意を告げると、ただちに「海神」は「大小魚鼈」を召し、「赤女魚」
の口から鉤を探し出す。その後、「彦火々出見尊」は「龍女豐玉姬」を
「妻」として「彼」に住むこと「三年三月」。「海神」は戻ろうとする「天
孫（彦火々出見尊）」を送るに際して、「潮溢瓊・潮涸瓊兩珠」を「宝
塔」に納めて与えたのである。

「門之浦伝來絵卷」等から得られた前述のごとき見通しを踏まえれば、
本書の編纂に際して、十六世紀以来この地域の信仰体系のなかで伝えら
れてきた独特な龍宮観が下敷きとされたと考えてよいだろう。冒頭に「神
代卷云」とあるが、それはもちろん『日本書紀』そのものからの引用で
はない。それは、同書に淵源をもちつつもそこから変容を重ねた、いわ
ゆる〈中世日本紀〉の世界をくぐり抜けたものであり、開聞岳をとりま
く額娃という土地の由緒を語る地域神話として新たな生命力を付与され
た言説なのである。

なお、『薩州額娃開聞山古事縁起』は、「十町村之内」に実在する「玉
之井」と呼ばれる井戸を龍女豐玉姬一行が水を汲んだ井戸とみなしたり
（「一、額娃郡玉之井森之事」）、「婿入谷」と呼ばれる土地を、彦火々出
見尊が「龍宮」に「婿入」した地とみなし、併せて「此地土中及石中貝
入^テ有リ、又巖石^ニ蟬巨大多シ、古為^レ龍海明白也、」（「一、婿入谷之事」）
とする理解もみえる。現地の実景や地質面での実態をも踏まえ、それを
積極的に組み込むことで、額娃＝龍宮とする説が構築されていることも
注目に値しよう。

さて、開聞宮を核とした右のような信仰体系が及んでいた範囲は、額
娃から北東にあたる喜入・指宿へ、北西・西は川辺・加世田・鹿籠へと
広がっていたと考えられる（「一、神廟領増減之事」）。このうち、鹿籠
については、「鹽土老翁無目籠^ヲ造リ、彦火々出見尊乗^セ、奉^レ入^三龍海^一処
故名也云々……」（「一、鹿籠卿之事」）とあることも目をひく。

門之浦は、その鹿籠からやや東に位置する海浜集落である。「門之浦
伝來絵卷」はこの地で二〇〇六年に発見された。別稿で論じたように、
同絵巻の巻頭には、魚を釣り上げる男性の姿や地引き網の場面があり、
巻末には海に囲まれた山を描き込むなど、開聞岳を望む海域での生活と
の深い結びつきが読みとれる。また、冒頭の第三・第四場面は、構図上、
丹後半島の宇良神社に伝わる『浦島明神縁起』の祭礼場面が転用された
可能性が高い。ここにも龍宮伝承を伝える人と文物の往還の影が透かし
見える。

また、氏神祭関係資料のひとつとして平峰家に伝えられてきた「富士
卷狩図」（仮称）は、全巻にわたって右の「門之浦伝來絵卷」とほぼ同
じ構図を持っており、兄弟のような関係にあることが近時判明した。平
峰家は、門之浦から東に約二・五キロメートルほどの距離に位置する水
成川という地域に所在する旧家である。同家に伝わる「平峰家文書」を

もとにして、この「富士巻狩図」を用いて執り行う氏神祭の内容に、開聞岳の東に位置する兎ヶ水という地域に伝えられた「ヲキエ十六番」と呼ばれる神舞が深く関わっていること、後世「山川濱兎ヶ水の浦」でおこなわれていた「沖江祭」が、「其式を見るに、彦火々出見尊海宮より還幸の装の如し。」（『麗藩名勝考』巻之四・薩摩国部第四・^ト額娃^ト郡^ト額娃郷仙田村）といわれるような、彦火々出見尊の龍宮訪問譚を基盤にしたものであったこと、またその神舞のさまが「富士巻狩図」や「門之浦伝来絵巻」に描かれた一場面に通じていることなどを、すでに別稿⁽²⁴⁾で指摘した。

以上のように、十六世紀から十七世紀にかけての南薩では、^ト額娃・開聞宮を中心とした信仰圏において、彦火々出見尊の龍宮訪問譚を基調としつつ、^ト額娃という地域の歴史と深く結びついた独特な龍宮伝承が展開し、地域社会のなかで意義を持っていたのである。

(2) 坊津・一乘院信仰圏の龍宮伝承

薩摩半島の南西端に位置する坊津には、これとは異なる龍宮伝承が伝わる。まずは、『坊津拾遺誌』に採録された「大龍権現来由記」に現れるその伝承の内容を整理しておこう。⁽²⁵⁾

①薩州川辺郡坊津の鳥瀬^スの傍らに大龍権現社がある。その由緒は以下の通りである。

②天平宝字のころ、大唐の鑑真律師が、「和国」にわが法を伝えようとし、仏舍利三十七粒を首に懸け、「漢土」を出帆した。「薩摩之沖^キ」の「硫磺渡」で「逆風」が吹き、海中がたちまち暗夜のごとくなつて、船は壊れた。「伝来之舍利」は「龍神」に奪われ、「舟子共」は海に漂い、命を落とした。しかし、鑑真ひとりには壊れた船の板に取り付き、海中に浮かぶこと三年。しかし、その身心は恙なかった。

③「漢土」にあった「法弟僧法心沙弥」は、鑑真を慕い、三年後に「和朝」をめざして渡海した。「硫黄之沖」に至ると、海上で「一僧」が「我所持^ト舍利、我^ガ伝来之宝珠」と唱える声を聞いた。船を近づけて見てみると、それはわが師鑑真であった。

④法心が事情を尋ねると、鑑真は「多年所持していた舍利を龍神に奪われた。身命に代えて取り返したいが、まだなし遂げられていないのだ」と答えた。法心は船から海へ飛び入り、「師弟」ともに「龍城之金門」に至った。

⑤二人は声を合わせ、「汝が奪った舍利は、仏祖伝来の宝珠で、わが珍宝である。返さないのなら、仏力の擁護によって南海を渴水となし、海底より猛火を發して、龍界を焼き亡ぼし、長く龍王の威勢を失わせ、舍利を取って本土に帰る」などと呼ばわった。

⑥これを聞いた龍王は、舍利を頂き、「界域之」「門戸」を開いて鑑真を礼し、この舍利を塔の中心に安置するならば、これを所持または拝信する者について、その「風波/障難」除き、「海上安穩」に守護しようと約束した。

⑦鑑真はその「誓約」を聞いて喜び、「鳥^ス瀬之登^リ絶頂^ニ」、壇場を飾つて舍利を安置し、「龍神供養之法筵」をもうけた。この地には「涌泉」があつて、その水を闕迦に用いた。龍神が「垂跡形」を現したこの地の岩窟に「小社」を建て「大龍権現」と崇めた。

⑧以来、今に至るまで、「俵氏^ト某」を「祭祠職^ト」として「二季^ト/祭祠^ト」が続く。ここに詣でる者は「乗船渡海/無恙」きことを信じなさい。その内容は、鑑真の日本への渡海に重ね合わせた、坊津への仏舍利渡来の物語となっている。この「来由記」には、「享保第四^{家記}歳霜月十八日、大龍権現兼別当意珠山龍巖寺一乘密院廿四世之住法印権大僧都堯周上人草之畢、」という識語がある。⑧にいう「祭祠職」を司った「俵氏某」

に関しては「今ノ六郎左衛門先祖也」という割書が付されていることからみて、「来由記」の内容は享保四年（一七一九）の段階で俄に創り出されたものではなく、これ以前から続く祭祀の実態を踏まえたものとみてよいだろう。⁽²⁶⁾

右の識語によれば、この由緒は、中世以来、坊津における宗教・文化の拠点であった龍願寺一乗院との密接な関係のなかでまとめられたものと考えられる。このことは、右の引用部に続けて、

鑑真伝来舍利、在一乗院宝蔵、又大和国在招提寺、是則鑑真律師基之寺也、其後撰州四天王寺^分、是又大和国竜田^分在法隆寺、

と、まずは「来由記」に記された鑑真がもたらした仏舍利が一乗院宝蔵に伝えられていることを特記し、同じく鑑真ゆかりの唐招提寺、四天王寺、法隆寺にもこのときの仏舍利の一部が分蔵されていると記されていることも関わる。すなわち、ここでは鑑真ゆかりの仏舎利の坊津を起点とした伝播の歴史、大局的にみれば、一乗院と畿内の著名な諸寺院とがひとつの舍利信仰圏を築きあげてきたことが語られているのである。察するに、大龍権現は一乗院の管轄下にあったのだろう。そして、「来由記」で語られている龍宮伝承もまた、一乗院で育まれたものが発信されたと考えるのが妥当であろう。

「来由記」では、渡海を伴う仏舎利の伝来や、海難・漂流といったモチーフや大龍権現への信仰が、「海上安穩」や「乗船渡海ノ無恙」きことを祈ることに収斂させられている。海上交通・交易をめぐる実態が前提とされていることが、その特徴といえる。また、「薩摩之沖」の「硫磺渡」あるいは「硫黄之沖」とは、現在は三島村に属する硫黄島周辺の海域をさす呼称かと思われるが、輸出資源としての硫黄を扱う对外贸易の実態に根ざした名称とみてよいだろう。さらなる用例調査が必要だが、地域色の濃い呼称かと推察される。この由緒が、坊津という土地の特性

を反映していることが、用語面からも追認される。

また、この「来由記」で語られている鑑真伝は、『唐大和上東征伝』にみえる来朝記事とは大きくかけ離れている。おそらく、かかる趣向の源泉のひとつには、『建久御巡礼記』（前田家本）招提寺の項などにみえる、鑑真が舍利三千粒とともに渡海を試み、日本に近づいたときに風波の難に遭遇してそれを海中に沈めたとする話が存在するものと思われる。前掲「来由記」識語に「鑑真伝来舍利、在一乗院宝蔵、又大和国在招提寺……」とあったことが、この話題が一乗院と唐招提寺との関係をふまえて生み出されたことをうかがわせる。ただし、鑑真が携えてきた舍利の数（「来由記」は三十七粒）や、弟子である揚州白塔寺法進は鑑真や他の弟子たちとともに来朝したとされること（「来由記」では「法心」は鑑真の三年後に渡海）などに大きな違いが認められ、「来由記」の記事に典拠があるにせよ、独自色を上塗りしていることは確かである。

一乗院は、鑑真ゆかりの舍利に関する〈異伝〉を制作し、積極的に発信するような場でもあったのである。ただし、坊津周辺地域では「来由記」所収説こそ鑑真の〈正伝〉として違和感なく受けとめていた可能性が高い。『東征伝』や『建久御巡礼記』などに基づく理解を持ちえた環境を前提としてしまうと、当該地域ならではの事態を見誤ってしまう。

（3）龍宮伝承に投影された地域差

さて、「来由記」では「薩摩之沖」の「硫黄渡」に「龍宮」があるとされている。

往昔天平宝字ノ比、大唐鑑真律師欲^{ガシ}令^下吾^カ法^ヲ伝^ハ中和国^ニ、掛^ケ仏舍利於^ニ首頭^ニ、撰^レ日乗^ノ船任^セ順風^ニ、漢土^ヲ出帆^ス。渡海追^レ日無^レ難、然^ルニ薩摩之沖^ニ於^ニ硫黄渡^ニ、逆風頻^ニ吹^キ起^リ、海中忽^チ如^ニ暗夜^ニ、被^レ破^ル船於^ニ為^ニ龍宮^ニ、已^ニ奪^ニ伝来之舍利於龍神^ニ、舟子共漂^シ蕩^シ海水^ニ、身命保者

無^レ更^レ、雖^レ然、鑑真^ニ独^ニ廢^{セル}取^テ舟^ヲ板^ニ隨^ヘ身、海中浮^フト三年、身心全^ク無^シ恙、……

そして鑑真は「硫黄之沖」で法弟法心と再会する。鑑真の決意を知った法心は、ただちに海中に身を投じ、二人は舍利を取り戻すべく龍宮へと赴くのである。

……問^ニ法心其由事^ヲ於鑑真、鑑真答曰、我多年所^ニ信舍利破^テ奪^ニ龍神^一、代^ニ身命^一一度^ニ雖^レ欲^ニ取^リ返^ス未^ダ遂^ニ、法心聽^シ之、忽^チ辭^テ舟^ヲ海底^ニ飛^ビ入^リ、師弟相俱^ニ到^リ龍城之金門^一、……

この後、龍王は鑑真の威に伏し、仏舍利を返却することになる。

くり返しになるが、鑑真師弟の龍宮訪問と舎利の奪還という展開は、他の鑑真伝には例をみない。では、これはどのように着想されたものなのだろうか。

ここであらためて想起されるのが、島津氏領国では幸若舞曲に親しむ土壌が培われていたことである。そして、新納忠増の例のごとく、幸若舞曲の本文やモチーフは、幸若舞曲受容者たちの新たな著作の一部として生まれかわることも大いにありえたのである。

「大龍権現来由記」の場合、何といっても幸若舞曲「大織冠」とのモチーフの類似が目ざれよう。「大織冠」も唐から日本への舎利伝来の物語である。いったんは「竜宮」に奪われた「三国一の重宝」たる舎利が、藤原鎌足の智謀と海女の献身によって奪還される。唐土から日本への舎利伝来譚という枠組み、渡海の途中での遭難、舎利がいったんは龍王の所有に帰すこと、海中の龍宮への訪問、龍王との対決、舎利の奪還、助力者の存在など、「来由記」の重だった構成要素は「大織冠」にも織り込まれている。龍王に舎利を奪われてから奪還劇が始まるまでに「三年」が経過しているという設定も共通している。

なお、鑑真が龍王に発した「若不^レ諾則以^ニ我仏力之擁護^一、作^ニ南海於

渴水^一、自^ニ海底^一發^シ猛火^一、龍界^ヲ燒亡^{シテ}、永失^ニ龍王威勢^一」という言葉は、三熱に苦しむ龍のイメージ⁽³⁰⁾を下敷きにした表現と考えられる(三熱のひとつが熱風・熱砂で身を焼かれること)。龍についてのこうした理解自体は決して特異ではないため、「大織冠」に基づく着想と確定できるわけではないが、「大織冠」の本文中には、龍王たちが「我らは、既に海底の竜王たりといへど、五衰三熱隙もなく、億劫にも会ひがたし」と語る場面や、鎌足が「それ竜神と申は、五衰三熱隙もなく、苦しみ多き御身なり」と述べる場面が存在することは確認しておいてよいだろう。同様に、「来由記」は、鑑真と法心は海中に身を投じて「龍城之金門」に至ったとしたり(該当本文前掲)、龍王が鑑真に舍利を返還する様子を「即頂^ニ戴^{シテ}彼舍利^一、界域之開^ニ門戸^一、向^ニ鑑真^一作^サ礼^{シテ}」と述べたりと、龍宮の「門」を意識的に描写していることについても、「大織冠」では、海女が見てきた龍宮のさまとして、「なをし先を見渡すに、楼門雲にさはさみ、玉の楣は霞の内、黄金の瓦は日に光り、蒼天までも輝けり。三重の廻廊に、四重の門を立てたる、一つの大裏おはします。竜宮城これなりけり」という、龍宮の門を具象化した描写がなされていることを視野に入れておきたい。

坊津そして一乗院は、島津家との関係を長く継続してきた⁽³¹⁾。十六世紀後半には確実に、島津家周辺で幸若舞曲に親しむ環境が成り立っていたことを併せみると、「来由記」にみえる⁽³²⁾とき独特な龍宮伝承が生み出される際、幸若舞曲(たとえば「大織冠」)から得た知識・理解が利用された可能性を否定できない。もちろん、阿部泰郎氏が指摘する⁽³³⁾ごとく、「大織冠」の背景には、じつに広大な中世の物語世界があることも忘れてはならない。また、現時点では、坊津・一乗院に幸若舞曲またはその本文が伝わっていたことを証す資料を確認できない。そのためここではあくまでも問題提起に留まるが、今後の検討を期したい。

以上、坊津の地で育まれた龍宮伝承を概観してきたが、それは地理的には隣接している開聞宮信仰圏と根本的に異なる龍宮理解である。穎娃はもと龍界であり、開聞宮はかつての龍宮だとする穎娃の地域伝承と、硫黄貿易に代表される海上の交易路を前提として海彼への視野を内在した坊津の地域伝承。中近世移行期の南薩には、地理的に隣接していながらも、かくも質の異なる龍宮伝承が併存していたのであった。それは、両地域が異なる歴史を背負い、異なる生活・文化環境を成り立たせていたことの証しともいえるだろう。⁽³²⁾

注

- (1) 小峯和明編『漢文文化圏の説話世界』（竹林舎 二〇一〇・四）、金文京『漢文と東アジア——訓読の文化圏』岩波書店 二〇一〇・八）、説話文学会編『説話から世界をどう解き明かすのか』（笠間書院 二〇一三・七）、井上泰至・長尾直茂・鄭炳説編『日中韓の武将伝』（勉誠出版 二〇一四・三）など。
- (2) 池宮正治・小峯和明編『古琉球をめぐる文学言説と資料学——東アジアからのまなざし』（三弥井書店 二〇一〇・一）、島村幸一編『琉球 交叉する歴史と文化』（勉誠出版 二〇一四・十）など。
- (3) 重松裕巳「中世末期武将の連歌——新納武蔵守忠元の場合——」（『連歌俳諧研究』二十三 一九六二・七）、橋口晋作『松操和歌集』の新納忠元、忠増、久品の和歌——その原形から所収形まで——」（『鹿児島県立短期大学研究紀要』二十八 一九九八・三）などで忠元・忠増親子の文化人としての活動が論じられている。
- (4) 鈴木彰『「忠増渡海日記」と幸若舞——文芸としての「覚書」』（山本博文・曾根勇二・堀新編『豊臣政権の正体』収 柏書房 二〇一四・五）

- (5) 桂は、名護屋の陣で小屋普請奉行として忠増と同役であった。白坂篤真は、『本藩人物誌』にいう白坂七右衛門篤実入道与竹のことか。

- (6) 「日記」では全四十四のうちの第九句の右肩に「ウ」、第二十三句の右肩に「二」、第三十七句の右肩に「ウ」と記されている。四十四句の場合、懷紙には八句・十四句・十四句・八句という体裁で書き込まれることを考慮すれば、この連歌記事は実際の懷紙に基づいて記されたかと考えられる。

- (7) 「うら山しくもかへる浪かな」は『伊勢物語』第七段で、「京にありわびて、あづまにいきける」男が詠んだ和歌の下句。『後撰集』巻第十九羈旅歌一三五二番歌。

- (8) 『大島出羽守忠泰日記及書翰 附大島家由緒 全』（東京大学史料編纂所蔵）所収。他伝本として、鹿児島大学附属図書館玉里文庫本「大嶋出羽守忠泰朝鮮渡海日記」などがある。『本藩人物誌』の忠泰項では「朝鮮陣始終日記」と呼ばれている。

- (9) 玉里文庫本は「ハツの龍宮」とある。

- (10) 玉里文庫本は「くはら」（＝掛絡）とする。

- (11) 平戸に到着する前日まで滞在した「牛のくひと申しそね」で、忠泰は「とせんの余りニ、山かけの岩の上におり居て、石に経などかきて龍宮江奉る」と記している。験者のごとき忠泰の姿は日常的なものであった可能性もある。

- (12) 森末義彰「薩南の芸能」（『中世芸能史論考』所収 東京堂出版 一九七一・十一 初出一九四四）。

- (13) 宮腰直人「弁慶の地獄破り譚考——島津義久と語り物文芸の関わりから」（『文学』隔月刊十三・五 二〇一二・九）。

- (14) 注（４）拙稿参照。

(15) 本覚書には、忠泰が釈迦の誕生会に参会する記事もみえる。

(16) 『上井覚兼日記』天正十一年（一五八三）七月十二日条に、「此日、御崎寺より幸若召烈可参之儀承候間参候、朝食振舞也、其後（定廊折生造）

一曲申候、先笛之巻、鎌足、太職官、此等也、舞過候て、點心にて御酒数返参候、種々乱酒也、拙者前より太夫へ三百疋遣候、」という記事がある。これらの曲を組み合わせた当日の関心は、異国・渡海というモチーフに向けられていたのではなかったかと推測される。

(17) 島津氏領国における語り物文芸受容史の根はさらに深い。その様相の一部を、二〇一四年三月九日に鹿児島歴史資料センター黎明館にて開催された隼人文化研究会・斉興の会合同研究集会にて、「薩隅日三国における幸若舞受容の系譜——山田聖栄・新納忠増・島津斉興——」と題して口頭発表した。その内容は順次、論文化する予定である。

(18) 『薩州額娃開聞山古事縁起』は、元亀二年（一五七二）七月十八日の兵乱で、「仏像経巻神器什物及勅書官符令旨御教書記録伝記等悉没却」と記す。『三国名勝図会』には「元亀二年七月、兵火の為に、古説を失ふ、故に当社に伝はれる記録の内、古書の証すべき者少し」とある（巻之二十三・薩摩国額娃郡・額娃之一・神社・開聞神社）。

(19) 二〇一三年、額娃町別府・水成川の平峰家で所蔵が確認され、その後、同家よりミュージアム知覧に寄贈された。本資料の性格と意義については、別稿で論じる。なお、その一部については、二〇一四年三月二日に立教大学で開催された公開研究会「曾我物語」の絵画化と文化環境——物語絵・出版・地域社会を手がかりにして」（国文学研究資料館若手共同研究「代表者宮腰直人」成果報告会）において、「南九州における〈富士野の巻狩〉図の受容と再生——

二つの神事絵巻をめぐる——」と題する口頭発表で報告した。

(20) 鈴木彰「『門之浦伝来絵巻』小考——南薩における神事・祭祀との関わりから——」（『ミュージアム知覧紀要・館報』十三 二〇一三・三）参照。

(21) このこと自体は、注（20）拙稿で指摘した。

(22) 注（20）拙稿。

(23) 注（19）の口頭発表で指摘した。

(24) 注（20）拙稿。

(25) 赤水大龍権現と呼ばれる小社が現存する。なお、『坊津拾遺誌』は坊津出身の商人、森吉兵衛が明治十六年十一月から十二月に、坊津各地の古文書等を書写して集成した書。

(26) 鑑真が海中に三年浮かんでいたとの記事に「此事古見『年代記』と注記していることも注目される。

(27) 鑑真伝については、蔵中進『唐大和上東征伝の研究』（桜楓社 一九七六・七）、安藤更正『鑑真』（吉川弘文館 一九六七・十）など参照。

(28) 同趣の説は、『建久御巡礼記』（神宮文庫本）招提寺の項末尾付記、『南都唐招提寺略録』、『唐招提寺縁起拔書略集』、護国寺本『諸寺縁起集』などにもみえる。阿部泰郎『「大織冠」の成立』（吾郷寅之進氏・福田晃氏編『幸若舞曲研究第四巻』所収 三弥井書店 一九八六・二）が、元興寺縁起が南都諸寺院の縁起説話に影響を与えたことを論じるなかで、この記事に言及している。

(29) 「赤梅檀の御衣木にて、五寸の釈迦を作りたて、肉色の御舍利を御身に作り籠めながら、方八寸の水晶の塔の中に納めて、無価宝珠と名付て、是を一の重宝」と描かれる。

(30) 『往生要集』巻上は、畜生道に関する記事のなかで、「またもろ

もろの竜の衆は、三熱の苦を受けて昼夜に休むことなし」とする。

- (31) 五味克夫「坊津一乗院跡と一乗院関係史料」(『一乗院跡』坊津町埋蔵文化財報告書一 一九八二)、橋口亘「中世港湾坊津小考」(橋本久和・市村高男編『中世西日本の流通と交通』所収 高志書院 二〇〇四・四)、栗林文夫「坊津一乗院の成立について」(『黎明館調査研究報告』十八 二〇〇五・三)、藤田明良「中世後期の坊津と東アジアの海域交流——『一乗院来由記』所載の海外交流記事を中心に——」(九州史学研究会編『境界からみた内と外』九州史学』創刊五〇周年記念論文集 下 所収 岩田書院 二〇〇八・十二)、福島金治「密教聖教の伝授・集積と隔地間交流——『坊津一乗院聖教類等』の検討を通して——」(『九州史学』一六〇 二〇一〇・十)、鈴木彰「『一乗院経蔵記』にみる坊津一乗院と中世文芸——地域社会における文芸環境——」(『立教大学日本文学』一一二 〇一四・一) など参照。
- (32) さしあたっては、坊津が中世以来島津家の強い支配のもとで歴史を刻んできたのに対して、額娃周辺(額娃郡・揖宿郡)は天正十六年(一五八八)に至って額娃氏の支配から島津氏の直接支配へと移行した地域であることを確認しておきたい。

〔付記〕 本稿は、二〇一四年一月三十一日(金)におこなわれた立教大学日本学研究所研究会「琉球・薩摩と東アジア——人と文物の往還——」における口頭発表に基づく。コメンテーターの島村幸一氏をはじめとして、ご意見を賜った諸氏に感謝申し上げます。なお、発表の終盤で指摘した袋中の琉球言説をめぐる問題については、紙幅の関係もあり、別の機会にあらためて詳述することとしたい。

〔使用テキスト〕 「忠増渡海日記」……『東京大学史料編纂所蔵「新納家文書」』。『伊勢物語』……『岩波旧大系』。『大嶋出羽守忠泰義弘公御供致高麗国渡海覚書』……『東京大学史料編纂所蔵島津家本(玉里文庫本により一部欠字を補入)』。『本藩人物誌』……『鹿兒島県史料集(Ⅷ)』。『上井覚兼日記』……『大日本古記録』。『額娃村里改帳』……『鹿兒島県立図書館蔵本』。『薩州額娃開聞山古事縁起』……『神道大系神社編四十五』。『鹿藩名勝考』……『鹿兒島県史料』。『坊津拾遺誌』……『坊津町郷土誌上巻』(ただし、鹿兒島県立図書館蔵写本も参照した)。『建久御巡礼記』……『校刊美術史料 寺院篇上巻』。『唐招提寺縁起抜書略集』……『大日本仏教全書』。『大織冠』……『岩波新大系』。『舞の本』。引用に際して、一部表記を改めたところがある。

(本学教授)